

世界問題を自分のことへ

宮城県仙台二華高等学校 2年 齋藤 花音

貧困、飢餓、教育の不平等、安全な水へのアクセス困難…。SDGsなど、国際問題解決に向けた取り組みが多く紹介されるようになった現代において、このような事実を全く知らないという人は少ないだろう。しかしその真実を知っていたとしても、世界問題解決に向けて実際に行動を起こすことは難しい。ではどうすれば人々が知識を蓄えるだけでなく、行動へと移すようになるだろうか。

中学一年生の春休みに、私はオーストラリアのパースでホームステイをした。そんなある日、ホストファミリーとの生活の中で急に家の水が出なくなってしまったことがあったのだ。原因は水の使い過ぎだった。パースは慢性的な水不足に悩まされていて水がすぐに止まってしまうという話を彼らから聞き、水が彼らにとっていかに貴重なものか知った。また、一度水が止まると数日間続くこともあり、シャワーも料理もままならないという話を聞き、驚きを隠せなかった。それまでは世界中の人が常に安全な水にアクセスできるわけではないことを知っていたものの、自分の友人もその一人だなんて思わなかったのだ。この出来事がきっかけとなり、水問題が身近になった。そして友人のように安全な水に常にアクセスできるわけではない人をなくしたいという気持ちが強くなり、実際に自分の出来ることを始めてみようと思うようになった。

そこで私は中三の夏、トロント大学に短期留学をした際に、水問題について、様々な国籍の生徒や教授の下でプレゼンを行った。世界には安定して水を得られない人がたくさんいること、またそれによって教育を受けられない子供や貧困に苦しむ人が生じてしまうこと、これらを解決するにはどうすればよいのかなどの私見を述べた。そして発表後セネガルやマリといった実際に水問題に困らされている国々にすむ友人に話を聞き、日本では知りもしなかった現状を知った。そしてトロントで学んだ実情をより多くの日本人に伝え、正しい理解に変えていくために国際理解に関する弁論大会に出場したり、国際理解に関するイベントに参加したりすることで水問題の現状を発信していった。また、その他にも学校で同じようにきれいな水を十分得られないカンボジアのトンレサップ湖周辺に住む人々について研究を行い、解決に向けて自分たちに出来ることを探したりした。

これはあくまで私の一例だ。しかしこれは他の人にもあてはまるのではないか。もしも自分の友人が困っていたら友人に手を差し伸べたい、何か自分にもできることをしよう、そう思うのではないだろうか。だから私は世界の人々と仲良くなり、お互いの国で起きている問題や世界問題解決に向けて取り組んでいることを話し合うことで世界問題がより身近になり、人々がアクションを起こすきっかけになると考える。今はコロナ禍のため実際に海外に行って国際交流を行うことは難しい。他国の学生と交流してみたいという声も多く聞かれるが、その多くの場合は交流できる場がなく、実現出来ていない。しかし、コロナ禍においてオンラインで会議やコミュニケーションをとることは容易になった。そこで学校や国、国連が主導となって世界中の学生が集い、お互いの国について話合える場を作りたいと考える。オンラインだとしても一週間に一回、一か月に一回でも会うことで次第に仲良くなれるだろう。そして仲良くなった友人と話合えることで世界問題が身近なものとなり、友人たちが世界問題に対して行動しているのを見て自分も何か初めてみようと思えるだろう。こうした経験を持つ若者が増えることで将来的に世界問題に対する世間の意識がより高まり、全世界の人が幸せと感ぜられる新たな世界が創り出されると思う。だから私もこれからを担う学生の一人として小さなことでも行動を起こし続けていきたい。友人を思う気持ちが世界でつながり、やがて笑顔で溢れる世界になると信じて。